Ⅰ-2　河川の形状

荒川の区分は、甲武信ケ岳の源流地点から六堰下流の約 85km 地点までの勾配が 1/2～1/1,000 を上流部、85km から秋ケ瀬取水堰の 45km 地点までの勾配が 1/1,000～1/5,000 を中流部及び、それより下流の感潮域を下流部としている。また、昭和 60 年の埼玉県による「荒川総合調査報告書」により、荒川流路を特徴的な地形によって区分した分類によると、山間部を源流域、秩父盆地部分を河岸段丘域、寄居町付近から熊谷市付近を扇状地域、盛土による堤防が施された中流部の低地河川を人工河川域、および下流部の東京都部分を都市河川域としている。

また、127 を数える支川は、中津川等上流部では山間部を流れる清澄な渓流であるが、中流部以降は、入間川に代表されるようにその多くが都市部を流れる都市河川となって本川と合流している。

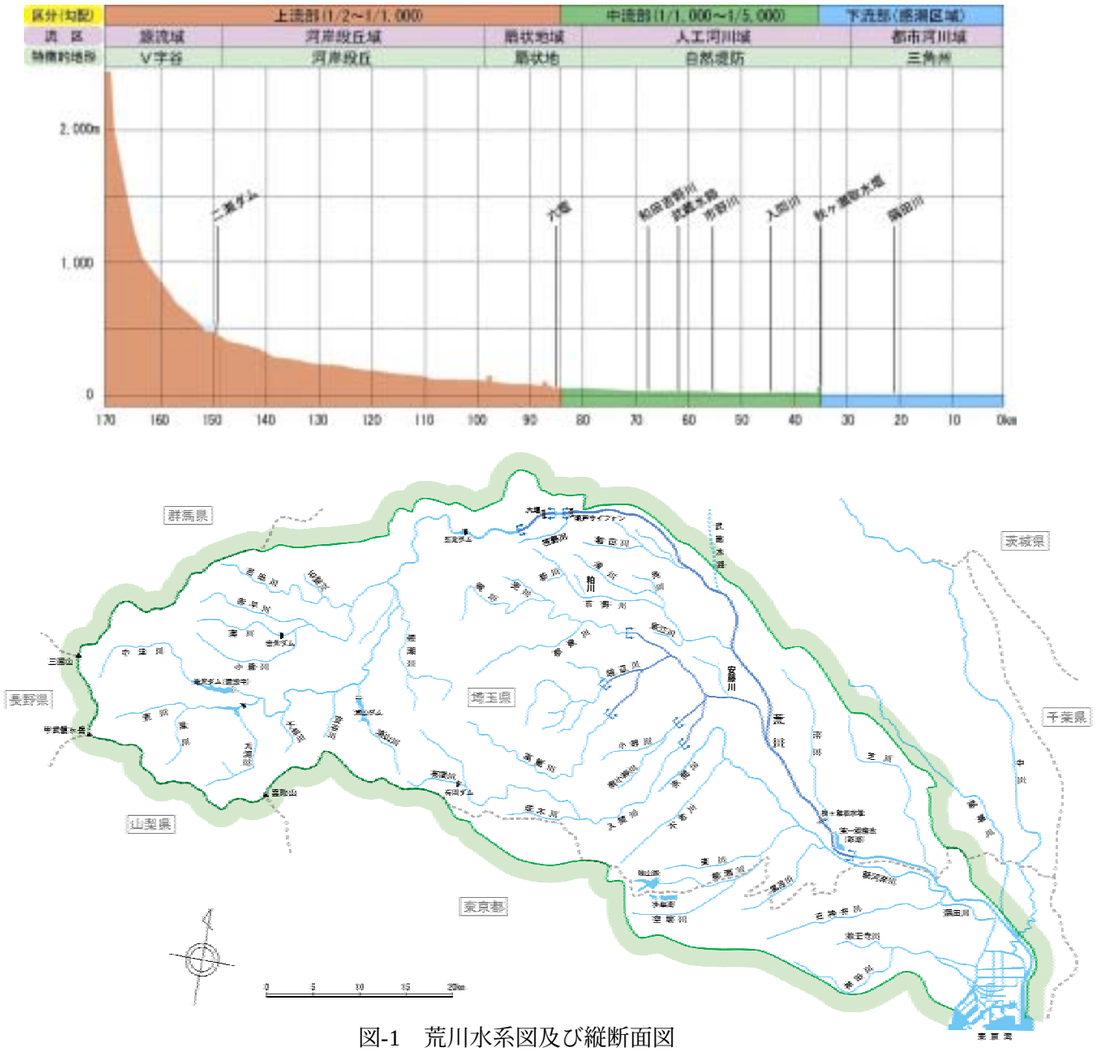

図-1　荒川水系図及び縦断面図

Ⅰ-3　河川の流況

①流量

武蔵水路の導水前の地点である大芦橋は、変動が大きい。この付近では渇水時、瀬切れが発生し問題になっている。

流況係数（最大流量/最小流量）は 1972 年（昭和 47 年）～2000 年（平成 12 年）の平均によると、寄居で約 400 であるのに対し、利根川（栗橋）では約 60 であることから、流量変動の激しい河川であるといえる。

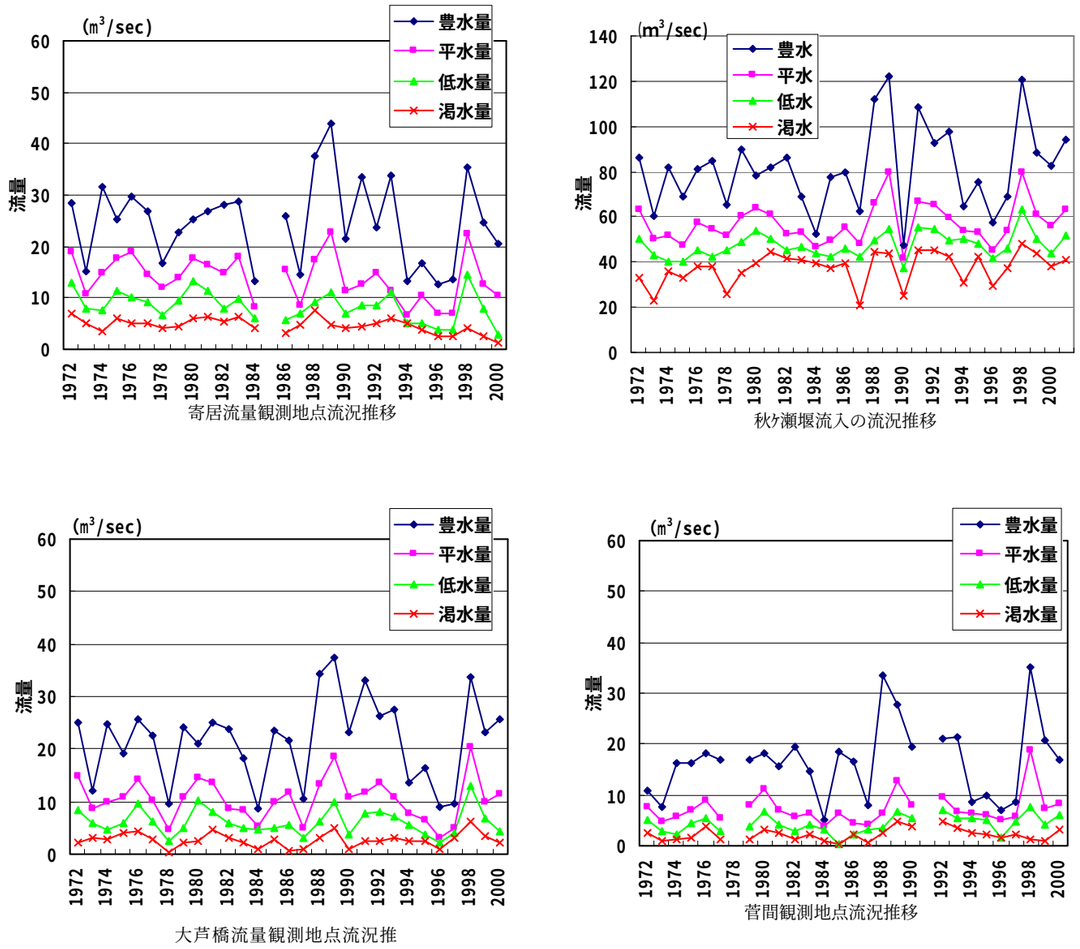

図-2　流量観測地点及び流況の経年変化

資料：河川流量年表